

**「信州から」 No.16**

長野県 大西 健介

基本高水の根拠となった雨量パターンが、その流域の洪水につながった履歴は見あたらないこと、「水田を活用して治水を」という提言が県に届けられたことなど、最近の動きについてお知らせします。

**1. 県高水協、論点協議はじまる**

長野県がダム計画を中止した9河川の、基本高水見直し・検証作業を進める県高水協議会（会員19名）は、月1回のペースでひらかれ、3月で6回目となります。

これまで基本高水についての論点提起をつづけてきましたが、ようやくその整理ができました。その骨格は、[I 今までの手法（貯留関数法等）への問題提起]と[II 新たな手法等の提案]となっています。

このうち[I]は、観測・流出解析・再検証等に関わる論点をまとめたものですが、協議は、雨量・流量観測所等の状況とデータ収集がどうであったかなど、「観測」に関わることから開始されました。

協議の中で確認されたことは――

- ① 9河川とも、洪水時の実測流量がないこと
- ② 水位・流量観測がおこなわれていなかったり、貧弱であったりして、データとして採用できないものがあること
- ③ 雨量データはそれなりに収集されているが、基本高水の流出解析に採用された雨量実績（パターン）が、流域の洪水につながった履歴はないこと

―― などで。とくに③の事実は、ダム計画に対応して採用された雨量パターンだったことを示すものと判断されます。

協議会では、このあと、「観測」に関する協議から「洪水確率」に関する協議にすすみ、7月には、[I 今までの手法への問題提起]の集約・中間報告を予定しています。

**2. 上川流協、水田貯留制度を提言**

上川流域協議会は3月24日、流域対策のかなめとなる「水田貯留」制度についての「提言書」を田中知事宛に提出、県は積極的検討を表明しました。

おもな内容は、次の三点です。

- (1) 豪雨時、上川への雨水流出抑制対策として、上流域のほ場整備されている水田に20cm貯留し、洪水ピーク流量をカットします。ダムで計画した流量の倍のカットが見込まれます。
- (2) 水田排水口に堰板を入れる方法によるもので、行政・地域一体となった水防体制で実施します。
- (3) 水田所有者には応分の財政的措置をおこないます。

上川では昨年3月、現基本高水の約80%に相当する1/50で、河川改修による「河川整備計画」が国交省の認可を得ています。協議会では、1/100計画にするため、流域対策を検討し、そのかなめとして、「水田貯留」制度について提言したものです。

(2006.4.12.記)

## 最近の新聞報道から

子分弁護士 加納 雄二

4月3日の朝日新聞(下記参照)によると、「穴あきダム計画ラッシュ」とのことです。

費用が安いし、自然にも優しいということですが……しつこいですね。

多くの場合は、多目的ダムからの計画変更です。しかも、過去に国土研が調査したダム(川)が多いのも何かの因縁でしょうか? 国土研もしつこく研究しましょう!!

穴あきダムでも、へドロは溜まるだろうし、眺めも良くない。特に穴あきならば、ゲートで塞いで貯水によって洪水を防ぐ筈の部分を開放するわけですから、設備としては無駄が多くなります(要は、コンクリートで大きな壁をつくっておいて、それに大きな穴をあけるのですから、壁の役割もろくに果たさない訳ですけど)。そんなんだったら、遊水池でもつくったほうがよほど経済的にも景観的にも良いと思うのですが。計画自体が、穴あき=欠陥とも思いますが。

3月27日の朝日新聞によると、大滝ダムの白屋地区の住民の移転先も地すべり地帯との記事があり、大滝、迫地区にも大きな地すべりがあるとのこと。住民がかわいそうです。

—————穴あきダム計画ラッシュ 安い建設費、「延命」批判も 2006年4月3日付 asahi.com.関西より

ダム堤体の下部に放流口を設け、普段は水をためない治水専用の「穴あきダム」が各地で次々と計画されている。今月中には島根県営の益田川ダムが初めて完成。国直轄や水資源機構管理の大規模ダムでも、昨年7月に多目的ダムからの転換が打ち出された丹生ダム(滋賀県)に続き、2月には足羽川ダム(福井県)の建設方針が決まった。国交省などは多目的ダムよりも建設費が安く、環境への影響も小さいと利点を挙げるが、「逆風が強いダム建設の延命策だ」と批判的な見方も出ている。/既存の大規模ダムのほとんどは治水や発電、農業、水道用水などの多目的ダムで、出水時でも一定の貯水をしておかなければならない。これに対し「放流型」「流水型」とも呼ばれる治水専用ダムは、出水時には一時的に水をためるが、流入量の減少とともに水位は低下する。以前から「穴あき」と呼ばれるダムはあったが、取水・放流口が堤体上部にあるなど貯水を前提としており、常時水をためない設計は、益田川ダムが初めてとなる。/貯水の必要がないため堤体が低く、建設費を軽減でき、水没面積も少なくすむ。水を完全に遮らないため、魚など生物は堤体の上下流を行き来でき、プランクトンなどによる水質悪化もない、と国交省は説明する。/不景気や節水技術の進歩で水需要が低迷する一方、台風や豪雨による水害被害が近年も多発していることなどが、計画ラッシュの背景にある。/福井県の足羽川ダムの場合、67年に多目的ダムとして計画されたが、反対運動で難航。県も水需要が見込めず、利水事業からの撤退を決めた。しかし、04年の福井豪雨で1万戸以上が浸水被害を受けたことで、治水専用ダムとして再浮上した。滋賀県の丹生ダムも近畿最大級の多目的ダムとなはずだったが、大阪府、京都府など利水事業者がすべて撤退し、貯水量の8割の需要が消滅。規模を3分の1にし、5300万立方メートルの穴あきダムに変更された。/ただ、専門家や住民の間では疑念も残る。/福井豪雨後、足羽川ダムは総工費620億円で計画され、議論が進められていた。その後、同省は治水容量を約2倍の2870万立方メートルに変更。総工費は1500億円に膨らんだ。専門家が建設の是非を検討した九頭竜川流域委員会のある委員は「治水専用ダムを持ち出すことでまず建設同意を得て、その後、規模を大きくしようとしたのではないかと話す。/皮肉な事態も生じている。3月中旬には、滋賀県・丹生ダムの建設を推進してきた人たちが、穴あきダムに反対する住民大会を開いた。/地元の余呉町は、当初の多目的ダム構想に合わせて、ダム湖岸に桜やもみじを植える公園づくりを計画していた。だが、穴あきダムではダム湖はなくなり、ふだんは石で覆われた堤体がむき出しになる。畑野佐久郎町長は「湖のないダムはいらない。観光ダムに期待してきただけに、方針転換に驚いている。国は我々をだますのか」と憤る。—————

☆ 記事では、益田川ダムが初めてとなっていますが、兵庫県の天王ダムが既に運用されています。ダムの直上流がテニスコートやグラウンドになっていて、大きめの防災調節池のようなものです。平常時のこれを見る限り、便利なもので、そう問題がないように見えますが、やはりいろいろ問題があります。特に小規模ダムに多いので、洪水時の水位変動が急激だと思われます。(中川) ☆

### ◇ お 願 い ◇

e-mail を新しくご利用の方、アドレスを変更された方は事務局までお知らせください。